

佐多稲子「四季の車」覚え書

——中野鈴子のことなど——

一 「四季の車」——通俗性とその問題点について——

『佐多稲子全集』（講談社）未収録の「四季の車」は佐多稲子の言^①によれば、「大連日日新聞」に一九四〇年から四一年にかけて発表された長篇小説である。（大政翼賛会^②）発足や（新体制のバスに乗りおくれる^③）という表現があり、作品の舞台となるのは一九四〇年初冬から四一年春までの東京である。

総合雑誌の編集者の高村信三と病院勤務の内科医の章子、高村の高等学校以来の友人の泉康助と昌代という二組の夫婦を中心に物語は展開する。昌代もまた高村が熊本時代に下宿していた親戚の家の娘であるという関係から、この二組の夫婦は二十年に及ぶ交友を続けている。作品は、昌代の友人の落合佳枝が離婚し、再出発を期して上京し、泉家に身を寄せるところから始まる。佳枝は高村の同郷

北 川 秋 雄

の知人の、帝都劇場に勤める大井雄作の世話で、帝都劇場の照明係の仕事につく。物語は、かつて恋人であった高村と佳枝の五年ぶりの再会に際して生ずる男女間の微妙な心理、さらに佳枝の同僚の小野寺志津子と高村の恋、それによって生じた高村夫婦の間の亀裂、高村の失恋、佳枝と泉康助の過失などという出来事を配して展開していく。一見して、太平洋戦争直前の戦時体制下における結婚・恋愛の問題を女性の立場から捉えようとした作品であるということができる。

たとえば、高村夫婦はともに仕事を持つ者同志の結婚生活の桎梏に悩む。「わたしは、わたしの仕事の中になつぷり打ち込みたい」病院の生活にも章子にはもう責任感以上のものがあつた。それだけにもつと自分の仕事を高めたい欲求もある。さういふ希ひを女が持つてはいけないこと^④というように、章子は自立意識を持つ

た妻として設定されている。一方、高村は（俺たちは今どつちも自分の仕事に熱中してゐる。女房はそのため、ひとりになりたい、と人にも言つてゐるんださうだ。……略……だけど、僕といふ人間は、そんなことで不満足な生活をしてゆくのは堪へられない人間なんだ。僕は日常生活の朝から晩までを充分満足して、精いっぱい暮らしてゆきたい方なんだ^⑤）と人というように、その妻の自立を認められない一般的な夫として設定されている。こうしてまず章子が離婚を口にし、高村は二十三才の独身女性で佳枝の同僚の小野寺志津子という帝都劇場の照明係の女性に魅かれ、彼女と結婚を決意するまでになる。このようにみえてくと、「四季の車」の高村夫婦は、前作の「くれなゐ」^⑥における柿村夫婦と相似形をなしていることは明らかである。

ところで泉昌代は章子の離婚話を聞いて次のように思う。

真に章子を可哀想におもひ、齒がゆくさへあつたけれども、これまでどちらかといへば、医者といふ立派な仕事を持つてゐる章子に対しては自分の方が引け目があるやうな感じだ、といつても別に競争意識なんかあつたわけではないけれど、たとへば夫の康助がもし章子をほめたりすると、そりや、あの人は学問もあるし、などといふ言葉で変に反抗してゐたのだが、今は自分が章子を氣の毒におもふ立場にある、といふことで、何となく満足感がある

のだつた。それに他人の家にさういふ問題が起きてゐるとおもふと、何事もない自分たち夫婦の生活が一層豊かに感じられてくるのである^⑦。

語り手は普通の主婦の立場にいる昌代によって、高村夫婦のような働く者同志の結婚のあり方を相対化しているのである。しかもこの昌代の主婦としての充足感も後に、夫の康助と佳枝の過失によつてもろくも崩されることになる。このように「四季の車」の語り手は、ヒロインの明子としばしば同化する「くれなゐ」の語り手とは異なつて、作中人物相互の関係によつて、相対化を試みることで、作中人物と一定の距離を保ちながら、時に応じて作中人物の内面に立入つて、その心理を読み手の前に呈示してみせる存在である。まさに「四季の車」は、佐多がかつて「くれなゐ」で扱つた実生活上の夫婦の問題を、戦時下における女性問題として普遍化しようと試みた作品といふことができる。

しかしながら「四季の車」はそれぞれの女性の次のような姿を描いて閉じられる。仕事を持つ新しい形の妻として設定された章子は志津子の許婚者の出征が原因で高村が志津子との生活を断念し、自分のもとにもどつて来たとき、（季節はたち返つてきてゐた。が、人の生活はたち返つて来ない。人生の車は、年月の道程を前へ進んでゆく。そして、あるときはすさまじい車輪の響きを立て、坂をか

けおる時もあるのだ。そんな想ひが章子の胸に溢れるやうにわいてゐる^⑤。という感慨に浸る。作中人物をとりまく戦時下の動静をすさまじい響きを立てて坂を駆け下りていく車輪にみだてていて、題名の「四季の車」が人生の車であることを連想させる表現であるが、いかにも人生には山や谷があるといった通俗的な人生観の次元で問題を解消し、戦時下の現実を運命論的に受入れていこうとする姿勢が色濃い。また従兄との結婚を周囲から強いられ、その「自分の境遇に反抗^⑥」していた志津子も、「人間の運命つて、やつぱり決まつてゐるんぢやないかしら」と思い、「私はやつぱり弱い女でした^⑦」

と高村に手紙を書き、従兄の出征に際して高村との恋を運命論的な形で断念する。さらに主婦の昌代の生活も彼女の留守中に起きた康助と佳枝の過失で、動揺する。「弱い者同志の陥つた罪だとお許し下さい^⑧」という佳枝の昌代宛の手紙を前に、昌代は「弱い者同志ですつて、あなたも弱いものなのよ。そんな夫にやつぱり喰いついてゆかうとしてゐる私は、何でせう^⑨」と泣きながら康助に詰問するが、「章子さんみたいに仕事を持つてゐないから、私は、今更あなたと別れるわけにもゆかないし^⑩」という昌代に対して、康助は「だつて、章子さんだつて別れはしないぢやないか^⑪」となだめる。康助の言葉には、新しい夫婦のあり方を求めてきた章子だつて、やはり自分達と同じように弱い存在であるという価値判断が示されている。高村

夫婦のあり様を相対化するねらいで挿入された泉夫婦のこの会話には、章子の陥つた問題が昌代の陥つた問題と同様の、人間の本来的な弱さに帰するものであるという作者の通俗的な人間観・人生観が認められる。

このようにみえてみると、佐多は「四季の車」において戦時下に生きる女性の問題を取上げながら、結果として戦時下の現実を運命論的に甘受していく女性像を無批判なかたちで描いて終っているといふことができる。

二 二つの単行本をめぐって

「四季の車」には時局にかかわる表現が多出する。これらは三種類に大別することができる。次に[A][B][C]として、その代表的な表現を掲げてみる。

[A] (1)「今日は、お菓子があつたわ。この頃は私の帰る時間には、パンは売切れ、お菓子なんかもないときがありますのよ」

「どうも仕方がないですね。銀座なんかの洋菓子屋の棚の中には、果物が並べてあつたのを見たよ。佳枝さんの方ちやまだ白米ですか^⑫」

(2)帰還した医師は、や、肥つて丈夫さうになつてゐた。年にはま

だ少し早い白髪が多くなつたことを笑ひながら言つて、子供を生むのが遅くなつた、と冗談めかしてゐたことなども思ひ出される。

この医師は満州事変にも二年ゆき、今度も三年出征してゐたので、結婚生活はもう大分になるのに半分も一緒にはゐなかつたと言つて、出征のあとに子供の生まれた仲間の者は、帰つてくるともう四つになつてゐて、そんなのは全くもうけものだと羨ましがつてゐた。^⑩

㊦ (1) 酔ふて語る彼らの課題も、必ずしも楽しいことばかりではなかつた。今日の情勢は信三たちの心を急き立てる。あれやこれやの課題もみんな大切な今日の日本の状態に關してゐて、それは若い信三たちの心を安閑とさせておかない事柄であつた。^⑪

(2) 劇場だけの観客たちを見てゐると、今日の日本の情勢など、大勢のものは無自覚なのではないか、といふやうなことさへ考へさせる。が、実際はそれほど単純なものではないにちがひない。けれどもやつぱり、この雰囲気には、単純でないだけにいろいろの問題をふくんでゐるのであらう。^⑫

㊧ 行進してゐた水兵は歩道から見送つてゐる人の中に知人を見つけたらしく、さつと片手を上げて、別れの合図をした。「ほう」と、信三は言つた。水兵のその仕草は、いかにも快活で、さばけ

て見え、氣持よかつたのである。片手を上げて振りながら、水兵は始終にこゝくしてゐた。^⑬

㊨ (1) は作中人物が会話の中で戦時下の生活物資の不足を嘆く部分である。また㊨ (2) は帰還した軍医が度重なる出征で出産の時期を逸したことに不平を漏らす部分である。生活必需品不足や出産という庶民の生活の次元からする佐多の、戦時体制への批判を讀みとることができる。

ところが㊨ になると表現が晦渋で、いわゆる奴隷の言葉で書かれた韜晦なのか否かという判断がつかない。㊨ (1) は久しぶりに章子と食事をしようと銀座で待ちあわせをした高村が、待ち惚けをくわされ、偶然出会つた友人と一緒に飲む場面の表現である。(必ずしも楽しいことばかりではない) という部分から作中人物の高村達のみならず、語り手の時局に対する暗い気分を讀みとることも可能だが、次に続く〈大切な今日の日本の状態 といふ〉(大切) さい内実や、それが〈若い信三たちの心〉をどのように〈急き立てる〉のか、立入つた表現は避けられている。㊨ (2) の帝国劇場に勤める大井の、観客をみて催す感慨についても同様である。第二文の冒頭が〈が〉、第三文目の冒頭が〈けれども〉というように逆接が二度重ねられた屈折した表現になつていて、すこぶる晦渋である。〈今日の日本の情勢〉など、大勢の観客は〈無自覚〉なのではない

のかという、時局に阿ねるかのような言挙げ的な表現をした後で、
〔実際はそれほど単純なものではない〕と前言を打消しながら、次
に逆接で続けて提示する（いろ／＼の問題）の内実が明らかにされ
ていない。

㊦は、高村が志津子と連立ってアパート探しの途中、日本橋の
方にむかって魚河岸の中を歩いているとき、その辺りの商店の息子
らしい若者が水兵として出征する光景に出会う場面である。時局に
埋没した典型的表現だと思われる。水兵の姿がたとえそうであった
としても、（へいかにも快活で、さばけて見え、気持よかつた）と高
村の感想を無批判にわざわざ語る語り手の意識は、侵略戦争の被害
者であるとともに加担者でもある兵士の現実的側面を捨象し、私的
感情を超越して国家に帰一する行為を崇高な美として賞賛する次の
ような兵士観と近接している。

どの兵隊も、足を痛め、胸苦しく、歯を食ひしばつて歩いてゐ
るには違ひないが、ここから見ると、寧ろそれはただ颯爽と
して、美しくさへ見える。いや、私はまさに、次第に、かくのご
とくも世に美しき風景があらうかと感じ始めた。かくのごとくも
一個一個が譬へ難い労苦に満されながら、それが全体として非常
に美しく見えるといふことは、見えるのではなく、ほんとうに美
しく、強く、勇しいのだと感じた。^㉑

私的感情を殺して、ひたすら国家に帰一しようとする滅私奉公的な
精神や行為に美を感じ、行軍する眼前の兵士の姿にそれをみようとな
する火野葦平の「土と兵隊」の周知の部分である。厭戦や反戦を表
立って表現することが困難で、しかも出征兵士の悲劇を取り上げる
ことは到底望むべくもない状況であったろう。しかしながらもし
佐多が侵略戦争反対の立場に終始とどまろうとしていたならば、この
ような出征兵士の快活な姿を書きつける必要がはたしてあったであ
らうか。このような㊦の表現を検討したとき、先の㊧㊨の戦争
批判や韜晦と受取れるものまで、そう好意的に考えていかという
疑問が出てくる。

ところでこのような時局についての表現を持つ「四季の車」は、
初出の新聞発表後、一九四一年六月に文芸春秋社から単行本として
刊行されている他に、戦後の一九四八年六月に労働文化社からほと
んど改稿^㉒されずに再刊されている。

かつて私は「敗戦直後の佐多稲子——戦後改作をめぐって——」^㉓
において、一九四六年五月発行の『たまたま^㉔』収録の小説「気づ
かざりき」が、一九四二年七月から十二月にかけて雑誌「婦人日
本」に連載された初出のものを大幅に改稿し、戦争協力と思われる
部分を削除している事実を指摘したことがある。このことから考え
ると一九四八年の「四季の車」再刊は大幅な改稿もなく、佐多の戦

時下の小説再刊についての姿勢に変化がみられる。「四季の車」にほとんど手を加えなかったのは、先にみたように「囹圄」の表現が見方によっては、戦時下抵抗の戦後における証左として佐多に意識されたからかもしれない。

あるいはまた、一九四八年という年は戦後の佐多が自己の戦争責任に対して意識的な方向性を見出した画期的な年であったことも見逃せない。この年の五月には、一九四六年二月から自己の古層を別決する仕事として書き継がれた「私の東京地図」が完結したし、六月には戦争責任問題を扱った最初の小説「虚偽」が、九月には「泡沫の記録」が発表されている。「気づかざりき」について大幅な改稿を行なって、戦争協力の痕跡を消そうとした敗戦直後のあり様から一歩踏み出し、自己の戦争責任を別決することで戦後を出発しようとする一連の作業の一つとして、「四季の車」再刊もあつたのではないかと思われる。

三 落合佳枝のモデル——中野鈴子のこと——

佐多稲子が中野重治の最期について書いたエッセイ『夏の葉——中野重治をおくる——』には次の記述がある。

中野鈴子を私が知るのには、先ず窪川の自分を語る話においてであった。それは五年前の、上根岸の日本画家の家に二階借りをし

て私たちが暮しはじめたときである。私には遠い金沢の、古い伝統の床しさと北国のほの暗さで想像される町に、四高の学生の窪川がいて、その下宿を訪れる中野の妹がいる。彼女は兄、重治の世話をするために郷里の福井の村から金沢へ出ていた。その鈴子は、自分の訪れた窪川の下宿の部屋で、ものを云わぬまま、うつむいた肩つきに一途さを見せてじいっと坐っている。窪川としては、自分は何か云うにしろ、若い女と二人だけにいる部屋の、ひっそりとしたそんな時間は、下宿の主人にあらぬ疑いも持たれようか、と気兼ねもせねばならなかった。窪川が二十か二十一歳、鈴子は十七、八歳である。窪川の方に、自分の行く手もつかめぬ不安を押すほどの情熱もないまま、二人とも金沢を去るときがきて、それが二人の別れでもあつた。鈴子はそのあとで父親のまとめた縁談で、郷里に近い町へ嫁いだ。が鈴子は、わずかの日数で生家に戻っている。鈴子の窪川に寄せた思いは、その婚姻によって悲しみの色合いに滲み、一層、切なさを深めたのらしい。窪川は、鈴子からきた手紙を一箱にまとめて持っていた。鈴子のその手紙のうちには、人の妻になつた自分のどうしようもない、昼と夜のあらがいさえ書きつらねたのがある。その手紙を保存していたのは窪川の、鈴子に対して抱く優しさだ。その手紙の箱を私の前に置くのは、私への彼の真情であつたらう。私は窪川の真情に

甘えて、中野の妹のその手紙を読んだ。そして私は、二通、三通と読み次ぐとき、ついに泣き出したのである。中野鈴子の訴えかける悲しみは、感情の流れそのままであふれ、その悲しみを自分の科ともするつましさを見せながらなお、今は死ぬしかない、と書き、そこに反抗にあえぐ息つかいも微妙に伝えていた。その手紙は悲しかった。悲しいと同時に、文章のこまやかさ優しさで美しかった。私はその悲しさと美しさに打たれて泣いた。この美しい手紙が束になって窪川の許に残されているということ、中野鈴子その人の美しさとして私は哀切に受けとめた。私はその手紙を読む頃、鈴子はすでに兄、重治の手紙で窪川と私との結婚を知らされていた筈である。だから鈴子から窪川へ手紙のくることはもうなかったのである。むしろこの結着によって、鈴子自身の上京が可能になったとも聞く。

ここには中野重治の妹の鈴子と窪川鶴次郎の金沢における恋、他家に嫁いだ鈴子の破婚と上京、同棲後鈴子との関係を窪川から聞いた佐多の気持などが語られているが、この窪川夫婦と中野鈴子の関係は、「四季の車」の高村夫婦と落合佳枝の関係に対応してはいないであろうか。たとえば「四季の車」には次の表現がある。

佳枝が上京するといふことは、泉から聞いてゐた。佳枝が郷里で無理に嫁つがせられた結婚をたうとう嫌ひ抜いて帰つて来た、

といふことも知つてゐたし、それが信三に対する気持を捨て切らなかつた結果だといふことも承知してゐた。……略……丁度佳枝がお嫁にゆく前に当る頃に、彼女は何か思ひ切つた手紙を信三のところへ度々寄越してゐるのである。何か可哀想なことをしたやうな感情は信三の方にも残つてゐた。

佳枝は高村が熊本の高等学校にゐた頃、下宿していた親戚の家の娘であつた昌代の友人として設定されていて細部には異同がある。しかし鈴子は一九二三年春から二四年の春まで金沢市古寺町の中野重治の下宿に住んでいる。窪川と知りあつたのはこの頃であろう。鈴子は一九二五年福井市に嫁ぐがすぐ離婚。ついで二六年二月に三國町の本堂格と再婚するが、再びすぐ離婚している。ちなみに窪川と佐多が同棲するのは一九二六年七月頃のことである。また鈴子の最初の上京は一九二九年、重治の下宿が東京市外杉並町高円寺二五番地にあつた頃のことであり、以後一九三〇年から三五年まで郷里と東京を往復するような生活が続く。その間、重治の影響で非合法活動に参加し、四・一六事件で逮捕された西田信春ら市ヶ谷刑務所に収監された活動家の救援活動や、六月に逮捕された小林多喜一の救援活動に従事するだけでなく、自らも一時期、検卒される。

さて中林隆信は鈴子について（わたしたちは人間の偉大さや崇高さだけに心引かれるわけではない。わたしたちはまた人間の愚かさ

や生きることの下手さ加減に心引かれることもある。ここに誠実ではあるが損ばかりして、初心忘るべからずとばかりまっしぐらに生きてきたひとりの女がいる。その愚直さとひたすらに私たちは打たれる^②と評している。

また澤地久枝も鈴子の手紙にふれて、〈中野鈴子の手紙はよくいえば「詩」のようであるが、用向きの足りる文章ではない。……略……鈴子の手紙には、兄がおかれてある境遇を斟酌し、おのれの思いは矯め、兄を力づけるような手紙を書こうという配慮はない。そのゆとりもなかったというよりは、これが「中野鈴子の正直さ」、個性であった^③〉と、先の中林の鈴子評と同様のことを述べている。

一方、「四季の車」においては、〈こんなときに、ぼつんと東京へ出てきて佳枝はほんとうに、あんなに言ふやうに働いてゆけるのだらうかと、信三は何といふことなしに、久しぶりに逢つた佳枝のことを危かしく考へた。……略……佳枝のまだ社会に慣れてゐないやうなあの夜の感じが、そんな危かしい気持を喚び起すのであつた^④〉とされる。また佳枝が自分にあてた手紙についても信三は〈佳枝らしくどくどく自分の身を卑下したりして、仕事の方も心配しなくてよい、などと言つてゐるのが、齒がゆかつたのである。自分は自分の道をゆきます、など、いふのも佳枝の言葉として聞くとをかしかつた。自分の道など、言つても何も具体的なことは書いてない。

きつと彼女自身、分つてはゐないのだ、と子供のやうなところのある佳枝のことが相変わらずだと思はれた^⑤とされている。先の中野鈴子評とこの「四季の車」の佳枝像は酷似している。佳枝が中野鈴子をモデルにしていると推定する所以である。

ここで問題になってくるのは、「四季の車」において佐多が自分達夫婦をモデルにした高村夫婦と、佳枝の關係をどのように描いているかということである。

佳枝は、高村の妻の章子のことは泉夫婦から度々聞いてゐた筈だつた。女で医者であると聞けば、高村さんもい、奥さんを持つたのだと思はれたし、その人が女としても自分などより優れてゐるらしいことが、泉や、泉の妻の昌代の手紙で、それとなしに知らされてゐた。よくくそれは承知してゐるつもりだつたし、今度上京したことにしても、決して高村へ何らの希望をつないで来たわけではなかつた。

それなのに、佳枝はやつぱり今、章子に対つて、身の縮むやうな思ひがしてゐた。章子が医者といふ立派な職業を持つてゐるからではない。医者といふやうな、男に並んでも一歩も引けをとらぬ仕事をしてゐながら、章子が美しいからだつた^⑥。

このように佳枝は章子に対して劣等感を抱く存在として位置づけられてゐる。また佐多は夫婦喧嘩をした後の章子と高村に次のような

会話をさせてもいる。

信三は、もう構ふのは御免だ、といふやうに眼をつぶつてゐた。仕方がないなどといふくせに章子には、やつぱりまだ信三に何か言ひたい気があつた。

そつと坐つて、

「ねえ」

と、言つた。

「うるさいね」

わざと、信三がくるりと向ふを向くと、章子はくすつ、と笑つて、「佳枝さんをお嫁さんにしてゐた方がよかつたのかも知れない、と思ふでせう？ 私なんかより」

「まだ、そんなこと言つてゐるのか」

と、信三はぱつと目を開いて、

「あんまり甘く見なさんな」

何かじゆうんと心よい涙が浮いた。

「ごめん」

と、章子は横坐りになつて言つた。^{①7}

（あんまり甘く見なさんな）という高村の言葉には自分は佳枝を妻にして満足に思うような程度の男ではないという態度表明があり、そこに章子は安堵と佳枝に対する優越感を感じて（じゆうんと心よ

い涙）を浮べる。夫婦共犯で佳枝の存在を軽視する高村夫婦の姿勢が鮮やかに示されている。このことから現実の窪川夫婦が中野鈴子に抱いていた意識をかきとるのは性急すぎるであろうが、先掲した「夏の栞」の佐多の（中野鈴子その人の美しさ）という戦後における鈴子評と比べて、あまりに落差が大きいということができる。

さらに、「四季の車」では全五二五頁中、四五八頁以降に泉康助と佳枝の過失がきわめて唐突なかたちで設定され一気に結末に向う。高村と佳枝の再会にまつわる男女の心理が描かれ、次に高村と志津子の恋とその破局が描かれ、作品世界が閉じられる流れの中でこの過失事件はとつてつけたような印象をうける。たとえば「素足の娘」のヒロイン桃代と川瀬の過失は全くのフィクションであるが、事実と混同され、川瀬のモデルと目された人に迷惑をかけたという。「四季の車」においても佳枝が中野鈴子をモデルにしたものであるなら、この過失事件がフィクションであつたとしても周囲に大きな波紋をひき起こすように思う。今少し、中野鈴子の実生活をみてみたい。

鈴子は一九三三年、小林多喜二の死を契機に上京し、義姉の原泉とともに浦崎梨子宅に身を寄せるが、原も住所を転々としている状態であつて、鈴子もまた壺井栄宅や窪川鶴次郎宅を連絡先として獄中の重治に手紙を出すような日を送つた。生活の見通しもないま

ま壺井家に身をよせ、窪川家へ子守りにいったり、稲子の看病に呼ばれたりしていたという。七月には原泉が検拳され、四ヶ月間留置、鈴子も十月末に検拳され、一ヶ月間留置される。

澤地久枝はこの頃の鈴子について「なにかジリジリと焦げるように追いたてられる胸中の思いを、自分では処理できずにいたと思われる。恋愛問題であったかも知れない」と述べ、次のような十一月二十三日付の中野重治宛の鈴子の手紙を引いている。

先日、ユリちゃん〔中条百合子〕と鶴さん〔窪川鶴次郎〕の前で、わたしが腹が据わっていないと言われ、それは不安であり、いけないことと申されました。……中略……わたしは今となって、もとのもつかい（木阿弥）の姿になり果てました。わたしは振り乱してドウコクしています。生活費、病氣、そんなものは問題になりません。わたしは一人の円満な死人よりもあわれなものなのです。失なわれたものはもう手に入らない。円満を失ったものの作業は、やはり円満を欠くものとなって作用することをさとりました。円満を失ったものが円満なものの中に振舞うことは害毒を流すものであることをさとりました。

鈴子が何らかの事件を引き起し、その処理に中条百合子や窪川鶴次郎がかかわっていたことがわかる。鈴子は勾留後、壺井栄の家を出て、一人で家を借りていたが、（円満を失ったものが円満なもの

の中に振舞うことは害毒を流す）というこの鈴子の言葉には、泉夫婦の円満な家庭を、康助との過失によって乱した佳枝の行為を彷彿させるものがある。

また澤地久枝は一九三七年当時の鈴子について次のように記している。

妹の東京での生活が、根なし草のようにいつまでも頼りないのを見ていて、中野は自立して一人で生きるように提言する。多少の経済援助も約束し実行した。鈴子は一人暮らしをはじめ、幾編かの詩を書き、随筆も書くが、それで暮しが立つ目途など立たない。そして、異性との問題が生じた。

前年に鈴子が東京を引揚げたのは、病氣療養（肺結核）のためといわれるが、妹のある「不行跡」に対しての、中野重治の裁断でもあった。具体的に、誰となががあったかは書くことができない。わからないことが多過ぎる。しかし、よほどの決意で生きてゆかなければ、食うにことかく日も来ようと兄が考えていたとき、鈴子はおのれ一身の悩みにのめりこんで、前後の見さかいなしという状態に身をゆだねていたようである。

さらに一九三七年九月二日付の原泉の中野重治宛の手紙には次のような記述がある。

鈴子さんのことは今日まで考えてみましたが、やっぱり私には分

らないといった方がいいように思います。気持では同情もし理解して、なんとかうまくゆくようにと思いつながら、それ以上に自分でどうするという気になれないのです。だからそちらで相談されて東京へ連れて来るといふなら、それもいいと思います。

経済的負担はともかくとして、あの人といっしょに住むことはいやです。だからといって、別にあの人が部屋借り生活することは、また前と同じような、友達を裏切らないまでも、あれに似たことは起ることは考えられます。^⑭

鈴子の再度の上京問題について率直に自らの感想をしたためた、この原泉の手紙の、へまた前と同じような、友達を裏切らないまでもあれに似たことは起る」という記述には、具体的に相手は特定できないまでも、明らかに「四季の車」の佳枝に似た鈴子の〈不行跡〉がうかがえる。

このようにみると、佐多が「四季の車」で何故、中野鈴子の〈不行跡〉を彷彿させるような微妙な問題を取り上げたのかという疑問が起きてくる。澤地久枝は、鈴子の周知の恋人である金龍濟關係の書簡さへ中野重治が秘匿した形跡を指摘している。^⑮まして佐多が自作の中で鈴子の過失を取上げていることを中野が知ったなら、中野と佐多の交友關係に亀裂を生じることになったにちがいない。

たしかに一九三四年の暮から三八年五月まで中野夫妻が小滝橋寄

りの柏木に住んでいた時期について、佐多は〈中野たちと近所に住んだその頃、私の側の淀んだ日常感覚のせいで私たちは、むしろもっとも遠くにいたような気がする。……中略……中野と原さんが、その翌年世田ヶ谷へ移ったとき、わがままな寂寥を抱いたのを覚えている。ああ、中野さんたちも、私を捨てた。私はそうおもったのである〉^⑯と述べている。原泉もまた一九三九年頃の〈この時期、あなたと一番離れていた……そんなとこ、ずっと卒業してきたから、今日まで続いたわけです〉^⑰と述べている。

周知の通り、一九三七年十二月十五日、中野重治は内務省警保局によつて執筆禁止の処置をうける。三八年十二月禁止処置はゆるむが、四二年から四六年六月の召集まで東京警視庁、のち世田ヶ谷警察署に出頭し、取調べを受けなければならぬ状況下にあった。原泉も一九四一年六月三十日、警視庁に呼ばれ、むこう六ヶ月間映画出演禁止を申し渡されている。一方、一九三九年から四二年頃の佐多の活動は戦地慰問・〈文芸銃後運動〉講演会の講演旅行等、戦時下の流行作家的様相を呈している。このようにこの時期の窪川夫婦は中野夫婦とは対照的な状況に身を置いていたため、両者の間には感情面での乖離が生じていたと思われる。このことが佐多に先の鈴子のことを淡々として小説の題材に取上げさせた理由の一つではなからうか。

ところが「四季の車」刊行後も中野夫婦と佐多の交友関係は表面的には変化はみられない。一九四二年三月十八日付の原泉宛の中野の手紙^⑭には、佐多の長男の健造の入学祝いのことなどが散見できる。また先述したように「四季の車」が一九四八年に再刊された後も、交友関係に著しい変化は認められない。たとえば、一九四八年六月二十七日の中野の原泉宛書簡には（文学方面の悪気流は克服された如く見える。稲子さんガンバリを恢復しつつあり^⑮）、八月四日原泉宛書簡には（家を建てるのは（とにかく冬の越せる当座のことだが）なかなかの仕事だ。稲子さんの大変も思いやられる^⑯）とあり、佐多に対する悪感情はうかがえない。「四季の車」が初出と二冊の単行本という発表回数にもかかわらず、中野の目におれることがなかったのか、それとも中野が沈黙を守ったのか、現時点ではにわかには確定しえないが、この鈴子モデル問題は種々の憶測を生むような、中野と佐多の交友関係の裏面を語る問題であることはまちがいない。

注

- ① 「日本学芸新聞」一九四一年十月十日。「大連日日新聞」は国内での架蔵は不明であり、中華人民共和国黒龍江省哈尔滨市の東北林業大学の谷幸治氏・王永盛教授のお手を煩わして、一九四〇年から四一年の分が揃っているのは大連市図書館のみであることが判明した。しかし現在、

マイクロフィルム化の作業中で閲覧は不可ということで、残念ながら初出は確認できず、拙稿は一九四一年六月に文芸春秋社から刊行された単行本の本文に基づいて考察を進める。

- ② 「四季の車」三八頁。
 ③ 同右三九頁。
 ④ 同右一〇五頁。
 ⑤ 同右一九八頁。
 ⑥ 「婦人公論」一九三六年一月～五月。「中央公論」一九三八年八月。
 ⑦ 前掲書三三五頁。
 ⑧ 同右五〇九頁。
 ⑨ 同右一九六頁。
 ⑩ 同右三八九頁。
 ⑪ 同右四三六頁。
 ⑫ 同右五〇六頁。
 ⑬ 同右五〇七頁。
 ⑭ 同右三七頁～三八頁。
 ⑮ 同右四七六頁～四七七頁。
 ⑯ 同右八一頁～八二頁。
 ⑰ 同右三九四頁～三九五頁。
 ⑱ 同右三三七頁。
 ⑲ 「土と兵隊」一九三八年十一月 改造社 一一〇頁。
 ⑳ 管見するところ異同箇所総数は一一九であるが、内容にかかわる大きな改稿は認められない。大半は句読点の異同で、その数は六四箇所に及び、しかもその中で戦後の句読点の位置がむしろ不適當と思われるものも十二箇所ある。その他は明らかに誤まりと思われる部分のみの訂正にとどまる。

- 23 『同志社国文学 第三十一号』一九八八年十二月二十日。
- 24 萬里閣一九四六年五月。
- 25 『人間』『展望』『中央公論』『婦人文庫』『別冊文芸春秋』『婦人』『新日本文学』『芸術』各誌に分載。
- 26 『人間』一九四八年六月。
- 27 『光』一九四八年九月。
- 28 『夏の栞——中野重治をおくる——』新潮社一九八三年三月、九二頁～九三頁。
- 29 前掲書十八頁～十九頁。
- 30 『中野鈴子全詩集』フェニックス出版、一九八〇年四月、三七八頁。
- 31 『佐多稲子全集第十八卷』講談社一九七九年六月、四九九頁。
- 32 『中野鈴子全詩集』解説三七五頁～三七六頁。
- 33 『愛しき者へ(上)』中央公論社一九八三年五月、三〇九頁～三一〇頁。
- 34 前掲書三九頁～四〇頁。
- 35 同右四一頁。
- 36 同右十一頁～十二頁。
- 37 同右六二頁～六三頁。
- 38 このことは繰返し言及している。たとえば『佐多稲子全集第三卷』講談社一九七八年二月、四〇一頁・『年譜の行間』中央公論社一九八三年十月、四七頁・『出会った縁』講談社一九八四年五月、二七三頁に散見できる。このモデル問題は佐多にとつてすこぶる心痛のものであったことがうかがえる。
- 39 『愛しき者へ(上)』二九五頁。
- 40 同右三〇九頁。
- 41 同右三一〇頁～三一頁。
- 42 同右三二五頁～三二六頁の一九三三年十二月九日付の中野重治の原泉

佐多稲子「四季の車」覚え書

- 宛手紙には鈴子の引越しのことにふれて、原泉があまり深入りしたくない、気持を持っていることが明らかにされている。引越しにからんで鈴子が何かを引き起したことがうかがえる。
- 43 『愛しき者へ(下)』中央公論社一九八四年四月、七二頁～七三頁。
- 44 同右八〇頁。
- 45 同右三二二頁。
- 46 『夏の栞』二二三頁～二二八頁。
- 47 『クローワッサン』一九八三年二月。
- 48 『愛しき者へ(下)』二四四頁。
- 49 同右四四〇頁。
- 50 同右四四六頁。